

Elizabeth Bishop の詩における symbiosis

巖 谷 薫

この論文ではカナダ生まれ、米国育ちの詩人 Elizabeth Bishop (1911-79) が1940年代に制作した詩集 *A Cold Spring* (1955) のうち、“A Cold Spring” と “View of the Library of Congress” を取り上げる。Bishop は主体と環境の関与を考慮した作家として多くの批評家に評されてきた (Costello 1991 15他)。彼女のこの性質には、意味とは所与のものではなく継続した回顧によって生じるという、プラグマティストの John Dewey (1859-1952) による主張が影響している。彼女はあらかじめ与えられた意味を外界に投影するのではなく、主体と環境の関わりから意味を立ち上げようとしていた⁽¹⁾。

1940年代末、マッカーシズムによる赤狩りの対象には共産主義者のみならず性的少数者や文化人等が多数含まれた。この状況下で、レズビアンであり議会に関わりの深い桂冠詩人として働いていた彼女は、私的領域の侵犯に恐怖を抱いていた。この恐怖の感覚に対処するために作品をつくる際、Paul Klee の美術作品を彼女は参照した。Klee の当時の作品の特徴として、様々な質感の間をどこにも属さずに漂う視点の創出が挙げられる (Samuels 2010 147-48)。Bishop の詩 “View from The Capitol of The Library of Congress” では、このような視点の創出をモデルに、外界を様々な質感で構成されたパッチワーク状のものとして捉えている。そして複数の物質性に対して常に距離を保ちながら、それらの間を漂うような主体を作品の中で構成している。

また、*A Cold Spring* (1955) のタイトルポエム “A Cold Spring” において、プラグマティストが唱えた “symbiosis” (相互共生関係) というキーワードを Bishop は表現している。“symbiosis” (相互共生関係) とは自然と文化の境界は明白ではなく、むしろ人間と自然が相互に依存しあって文化を作り上げてきたという考え方だ。この詩では “View from the Capitol of Library of Congress” において描かれた、人間が上位で自然が下位であるという力関係は転覆される。ある要素がほかの要素の動きを誘い、また質感を絵のように重ね合わせて描くことで、自然界の各要素を相補的なネットワークとして Bishop は描写する。そしてものの質感だけではなく感覚も重なりあい、融解し、ネットワークを形成するような世界観を、視覚と聴覚の混交により表現する。さらにこのネットワークに人間文化のイメージも重ねる。その結果、人間は「自然」の支配者ではなく、むしろ世界のネットワークの一要素として表現される。

加えて、先行研究では指摘されていないものの、“A Cold Spring” にはこうした技巧や世界観

を通じて、John Dewey や Charles Darwin (1809-82) の思想が表現されている。Darwin の自然選択思想とは、個別の生物が同一の行動を繰り返すことによって少しずつ変化が生まれ、それが累積して「種」の存続に有利になるというものだ。Dewey はこの考えをもとに、知識は常に仮定的であり、経験の再解釈の連続によって意味（深さ）が生じる、と考えていた。この考え方は、聖書によってあらかじめ定められた意味が世界に反映され、その意味こそが「深さ」となる、という神学者 Reinhold Niebuhr (1891-1971) の考え方とは対照的である。Bishop 自身、意味は経験が繰り返されて生じるために、完成することがないと考えていた。このため、彼女にとって Dewey の言説は非常に強力な典拠となった。

美術における主体と環境

美術に造詣の深かった Bishop は、美術作品に主体と環境の関係性のモデルを求めた。1940年代に彼女が特に影響を受けたのが Paul Klee の作品だ。Klee の “The Man of Confusion” (1939) 等の作品には、外界からの圧力によって自己の統合性が分断される感覚が表現されている。後述するが、自身もマッカーシズムによる私的領域の侵犯に怯えていた Bishop は、このような Klee の表現に感銘を受けていた。彼女が影響を受けた Klee の作品では「皮膚や意識が暴力的に侵食されるような環境の中で、主体が自然に対して強固な壁を築くのではなく、破滅的に開けてしまっている」と Peggy Samuels は表現する (Samuels 2010 58-59)⁽²⁾。一方で、Klee は「浮かんでいるような色、テクスチャーや形等のモチーフで構成された景色の間を漂っていく目 (eye/I) や耳」として作品中の視点（絵の中の見る側の者、viewer）を設定している、と当時の美術批評家たちは強調した (Samuels 2007 548-49)。このことで、Klee が「環境に対して破滅的に開けてしまっている」自己の危機を解消するために、深い空間を示す技巧を使っている、と彼らは評



Paul Klee, The Man of Confusion (1939)



Paul Klee, Glance of a Landscape (1926)

価したのだ⁽³⁾。

このように受容されていた Klee の “Glance of a Landscape” (1926) 等の作品を Bishop は参考にした。そして彼女は詩の中で、様々なモチーフや質感を用いて複雑で動的な関係をつくりながら、詩の話者（視点）を詩で描かれる環境の目撃者としている。かつ、示された関係の中でどこにも固着せずに視線が漂うことで、全体の構成をまとめる存在として立ち現れる (Samuels 2007 543-44, 2010 56-69)。すなわち、詩の視点はどの外的存在とも一定の距離感を保ちながら存在しているのだ。これが Bishop にとって「暴力的な侵入」に対処するモデルだった。

“View of The Capitol from The Library of Congress” と時代背景

「主体への暴力的な侵略」とは実際にはどのようなものだったのか。40年代末、合衆国はソビエトとの冷戦に突入し、さらには朝鮮戦争を始めようとしていた。国は、戦争を正義のために行うという世論を盛り上げようとしていたのだ。このため「合理的で知性的な戦争が共産主義を抑制し、ヨーロッパを再建し、世界を救う」というレトリックを流布させていた (Roman 2001 115)。しかし Bishop はこのような時勢を批判した。

“View of The Capitol from The Library of Congress” は1949-50年に執筆された。Camille Roman はこの詩が綿密なカモフラージュを施した上で、戦争を鼓舞する文化と軍国主義に抗っていると述べる。この詩は同期間に Consultant in Poetry to the Library of Congress に就任した Bishop が、図書館から見た米国連邦議会議事堂の眺めを書いたものだ⁽⁴⁾。彼女は国の桂冠詩人として議会付属の図書館で働いていた。このためワシントンの日常生活に冷戦が「侵入」してくるさまを、彼女は目撃せざるを得なかった。

この詩の第一連では、議事堂のイルミネーションの光がドームを照らす様子が描かれる。

Moving from left to left, the light
is heavy on the Dome, and coarse.
One small lunette turns it aside
and blankly stares off to the side
like a big white old wall-eyed horse. (Bishop 2011 67)

一つだけ小さな窓が開いて、うつろに横を眺めている視線に例えられる (“blankly stares off to the side”)。この視線が「年老いた馬の斜視」 (“a big white wall-eyed horse”) のイメージにつながる。ここで目を引くのは、光が「左から左へ動く」 (“Moving left to left”) という表現だ。なぜ左から右ではなく左から左なのか⁽⁵⁾。Camille Roman は、草稿ではこの部分が “Moving left to far left” であったと明かしている (1999 253)。つまり、斜視の馬のように視界が遮られ

て一部しか見えず、世界が歪んで見えることを意味する。これにより一部しか見えない議会に秘密があるという状態が暗示されているのだ。Roman はさらに Bishop の草稿にある “harsh, stiff moss of Justice on the Capitol dome”（議会議事堂に根付いた、こわばった苔であり無情な裁判官）という記述から、これらの隠喩が赤狩りの舞台となった下院非米活動委員会（The House Committee on Un-American Activities）、および当時の上院議員だった Joseph McCarthy による多数の市民、特にホモセクシュアル、自由主義者、知識階級や文化人を標的とした攻撃を暗に批判したものと解釈する（Roman 1999 252）。このような状況下で Bishop は、国を代表する詩人という立場で議事堂に近い場所に勤務しながら強い圧力を感じていた。

この詩の話者の視点はどこにあるのだろうか。図書館は議事堂の隣に位置する。話者は図書館の上階にいて、描写対象であるドームを見下ろしている。しかし話者は風景の中には入っておらず、どこかに浮かんで隠れているような印象がある。こうした宙に浮かぶような視点も Bishop が美術作品に学んだ実験に基づいている。*A Cold Spring*（1955）の創作時、Bishop は環境における物質性と主体との関係について実験を行っていた。この作品において、はじめ光は様々な質感の表面（窓、ドーム等）を照らし出す。それに伴って光は質感（“heavy”, “coarse”）を変える。窓はその光を吸収しない（“the small lunette turns it aside”）。したがってこのような質感は互いに融解することがない。そして、どこかに浮かんでいるような主体（詩の話者）がそれらを記述しながら全体を構成している（Samuels 2010 147-48）。

この話者の浮遊感とは、主体がどこにも属さないという感覚である。Roman の指摘する、Bishop が草稿でマッカーシーを暗示した記述にある “stiff moss”（ドームにへばりついた苔）という言葉とは対照的だ。レズビアンであった Bishop にとって、当時の空気はきわめて脅威的だった。プロパガンダに協力する詩人にもなれず、友人の Ezra Pound のように国家への反逆罪に問われる危険も冒せぬまま、女性詩人として（国家の貞節な妻としての）Penelope の役を求められた Bishop には相当なレトリックが必要であっただろう、と Roman は推測している（Roman 2001 116）。

このような浮遊感は、ワシントンからの Bishop の疎外感も表している。彼女はワシントンという土地が「リアルではない。花崗岩と大理石の大建築、ほかの大都市の大仰なコピー...」（“Washington doesn’t seem quite real. All those piles of granite and marble, like an inflated copy of another capital city...”）だと記述している（Bishop 1994 194）。Roman は、この “piles of granite and marble” のイメージが墓場につながる、と指摘する。そしてこれを、冷戦下における虚勢を張ったようなミリタリズムの背後にある、死んだような現実を示している、とする（Roman 2001 118）。マッカーシーの個人攻撃によって Bishop が感じていた圧迫感に加えて、ワシントンという都市が持つ壮大で冷たい質感（“granite and marble”）からの圧迫感もあった。

また Bishop は、韓国に米軍が到着した当時の、ワシントンが軍に占拠されかのような状況を

このように記している。“Washington seems composed of equal parts of airplanes, starings [sic], electric drills, and thick, oily storm. The beautiful spring lasted exactly one week” (21 August 1950, Bishop Archives, Vassar, qtd. in Roman 2001 251)。この記述には、Bishop が周囲の物質性や質感を鋭く捉えながら、それらの質感をパッチワークのように捉えている様子が見えがえる⁽⁶⁾。その中を漂うように Bishop は暮らしていたのではない。Bishop は当時、特権的な文化の中心に存在し、議会の背景も知っていたが、それを隠喩的にしか批判できない立場にいた。こうした疎外感が、彼女の物質に対する感受性にも表れている。壮麗で冷たい都市の景観に属することができないという疎外感は、視点の浮遊感を生む。そしてその視点は互いに相混じることのない質感の間をさまよっているのだ。

第二連では愛国心を鼓舞するための空軍のマーチングバンドの音が描写されるが、奇妙なことに、すんなりとは聞こえない。

On the east steps the Air Force Band
in uniforms of Air Force blue
is playing hard and loud, but—queer—
the music doesn't quite come through.

It comes in snatches, dim then keen,
then mute, and yet there is no breeze.
The giant trees stand in between.

I think the trees must intervene, (Bishop 2011 67)

この詩では聴覚的表現と視覚的表現が分離し、対比的なものとして描かれている。これらの感覚表現の対比は、人間的存在と自然的存在の対比を示している。人間的存在がマーチングバンドの音で示されるのに対し、自然的存在は木々として視覚的に示され、両者は対立するものとなっているのだ。作者の、外見上は音を聞いているようで実際は聞くことを拒んでいる、という不調和を、Roman は “queer” という言葉に読み取っている (Roman 2001 126)。次の連では音が急に鈍くなったり鋭くなったりするように聞こえるが、それは音と作者の間に木々が介入 (“intervene”) しているためだ。

マーチングバンドの音を受け止めて介入する木々の存在は、Bishop の作品にしては珍しく強い話者の主張——“I think the trees must intervene”——を補強するかのよう、[i:] の音の繰り返し (trees, between, intervene, leaves, Unceasingly, feed) で強調されている。まるで音でリズムをつくることでマーチングバンドのリズムに対抗するかのようだ。

catching the music in their leaves
like gold-dust, till each big leaf sags.
Unceasingly the little flags
feed their limp stripes into the air,
and the band's efforts vanish there. (Bishop 2011 67)

木々が間に立って音を吸収するせいで、マーチングバンドの音は弱まり、よく聞こえなくなる。第三連二行目の“gold-dust”という語により、音が物質“dust”（粒子、花粉）として表され視覚化されることで、やっと自然的存在（木々）と同列の存在として描かれる。音と視覚性は言語として表現されることで、初めて同じ世界に編入されるのだ。

このようなマーチングバンドの音やそれに関連付けられる軍国主義や国家と、木々や戦争に反対する市民の対比は、男性と女性の対比としてジェンダー化されていることが、Bishop の草稿やメモからわかる (Roman 1994 253-54)。最後の連では、マーチングバンドの音を捉える自然、すなわち女性的存在は「影」として描かれる⁽⁷⁾。

Great shades, edge over,
give the music room.
The gathered brasses want to go
boom—boom. (Bishop 2011 67)

“Great shades, edge over”にはカンマがあるため命令文と考えられる。また“edge”を動詞として考えると、木が動いてマーチングバンドに道を譲れ、とバンドが命じていることになる。だが、木が動くことはありえないので、結果としてバンドは「進んで行きたい」(“The gathered brasses want to go”)と述べるのだが、実際には進んでいけない。こうして詩は、音を張り上げながらもマーチングバンドが木々に阻まれて進めない様子を描き、虚勢的な軍国主義文化に対する皮肉を込めて詩を終えている。また最後の連では、[i:]の音に代わって[u:]の音が“room”から始まり、“boom-boom”で他の音の余地が入らない状態で終わる。ここにはBishopの、木々が音楽を防いで打ち負かしてほしいという願望 (Roman 2007 253) と、木々に投影されたその願望が強烈な破裂音に負けそうになっている、という危機感の両方が込められている。この詩における木々の影は音すなわち男性的な存在を受け止め、これを捉えて逃さない。

“A Cold Spring” における symbiosis の表現

前節で論じた、主体が外界を質感のパッチワークと捉え、その間を浮遊しながら外界を反映している、という構成は、“A Cold Spring” にも登場する。この詩では様々な生物やものが異なる速さで動く。さらに Bishop は、自然的な存在を相補的なネットワークとして描いた上で、そこにわずかに人間（文化）のイメージを加えている。このことで、人間は中心的な存在ではなく、むしろ世界のネットワークにおける様々な素材のひとつとして示されているのだ。“The View of The Capitol from The Library of Congress” で示された人（文化）と自然の鋭い二項対立は、この詩で崩された上、自然が前景化されている。こうして、詩において文化と自然の力関係を転覆することで、現実世界では環境（春）に暴力的に侵入してくる文化（ミリタリズム）に対して Bishop は対抗しているのではないか。人間が前景化されることなく、自然と人間の文化が対等に相互作用する彼女の世界観には、Dewey などプラグマティストたちのキーワードである symbiosis（相互共生関係）や、Darwin の自然選択思想が感じられる。

“The View of The Capitol from The Library of Congress” を書いたころ、Bishop の日記に記された「ワシントンの春が軍の占拠によって終焉を告げた」という感覚（“The beautiful spring lasted exactly one week”）は、ほぼ同時期に書かれた“Cold Spring”にも響いている。ストレスの多いワシントンでの生活から退避するかのように、Bishop はメリーランド州のハバディグレイスにある Jane Dewey（John Dewey の娘）の農場を訪れる⁽⁸⁾。A Cold Spring（1955）のタイトルポエムであるこの詩は、この農場で Bishop が日々つけていた日記を元に作られた。つまりこの詩の設定はパストラル（牧歌詩、田園画）である。しかしタイトルからもわかるように、彼女は素晴らしい春などは謳っていない。エピグラフは Bishop が敬愛する Gerald Manley Hopkins に捧げられている（“Nothing is so beautiful as spring.”）（Bishop 2011 55）。もちろんこれは反語的な表現だ。Hopkins の描く春は墮落前の楽園的な瞬間だが、Bishop はそれを受け入れない（McCabe 115）。さらに彼女はキリスト教的な春を否定しながら、ダーウィンの思想を反映した自然界を描いている。

第一連は非常にゆっくりとした、不確か（hesitated, waited, carefully, Finally, inclined to）な春の始まりが描かれる。牛の出産と自然界が重ねられ、丘に花粉 “a grave green dust” が舞い降りることで牛が受胎する⁽⁹⁾。そのことによって自然界全体が受胎するかのように描写されているのだ。

A cold spring;
the violet was flawed on the lawn.
For two weeks or more the trees hesitated;

the little leaves waited,
carefully indicating their characteristics.
Finally a grave green dust
settled over your big and aimless hills.
One day, in a chill white blast of sunshine,
on the side of one a calf was born.
The mother stopped lowing
and took a long time eating the after-birth,
a wretched flag,
but the calf got up promptly
and seemed inclined to feel gay. (Bishop 2011 56)

前作で見た様々な質感の交差はこの詩にも生かされており、さらに動きの早さという要素が加わっている。Samuels は Bishop の日記を元にしながら、この詩の動きが Alexander Calder のモビールに影響を受けたものであることを明らかにしている。1940年代、美術批評家たち（Robert Motherwell 他）は Calder を、Klee と同様に Piet Mondrian に代わる新しさを持つアーティストだと考えていた⁽¹⁰⁾。彼のモビールはある要素がほかの要素とは決して交わらぬまま、しかしその動きがほかの動きを呼ぶ。“A Cold Spring” で、ある動きに対して不均衡なボリュームや活動を対置させることで、Calder のモビールのような動きを Bishop は再現している。上記の連では丘の曲線や大きなボリューム、塊（“big, aimless hills”）を置き、ゆっくりとした動きを示した上で、最後に突然素早い動きを加える（“the calf got up promptly” / “and seemed inclined to feel gay”）。この動きが他の動きを呼ぶきっかけとして示されているのだ（Samuels 187-88）。

またこの連における “aimless” という語は、主体の当て所のなさを示すと同時に「個体」の行動の当て所のなさも示している。後述するように、Darwin の論点の一つには、目的のない個別の行動が累積すると、種の優位性としての特徴となるという点がある。この連での、それぞれが関係なく個別的に起こっているように描かれる動きは徐々に呼応し合い、最終連での意味の達成に繋がっていく。

第二連では画面に筆を置くかのように丘の細かな状景が描かれ、春が始まる様子が示される。この連ではイメージの重ね合わせや知覚の混交を用いながら、世界におけるそれぞれの要素（植物、動物、人間のイメージ、色、音など）が相補的にネットワークを構成する様子が表現されている。

The next day

was much warmer.
 Greenish-white dogwood infiltrated the wood,
 each petal burned, apparently, by a cigarette-butt;
 and the blurred redbud stood
 beside it, motionless, but almost more
 like movement than any placeable color.
 Four deer practiced leaping over your fences.
 The infant oak-leaves swung through the sober oak.
 Song-sparrows were wound up for the summer,
 and in the maple the complementary cardinal
 cracked a whip, and the sleeper awoke,
 stretching miles of green limbs from the south.
 In his cap the lilacs whitened,
 then one day they fell like snow.
 Now, in the evening,
 a new moon comes.
 The hills grow softer. Tufts of long grass show
 where each cow-flop lies.
 The bull-frogs are sounding,
 slack strings plucked by heavy thumbs. (Bishop 2011 55)

色の連続性を描くことは Bishop の特徴の一つだが、ここでも木々の緑の中に、緑がかった白が置かれ (“Greenish-white dogwood infiltrated the wood”)、色がグラデーションとなって、各要素が「浸透」(“infiltrate”) しあっている。そして “the blurred redbud stood” という b と d の音の入り混じりによっても各要素の「曖昧」(“the blurred”) な交差が強調されている。その上にはほんの少し動きのイメージ (“but almost more / like movement than any placeable color”) が加わることで、春が動き出すきっかけが与えられる。

この連で Bishop は現実描写とイメージ世界を重ね合わせる。さらに Bishop はこの手法を用いながら、この詩の第三連と第四連で自然と人間のイメージも重ね合わせている (“each petal burned, apparently, by a cigarette-butt;”, “and in the maple the complementary cardinal/ cracked a whip, and the sleeper awoke, / stretching miles of green limbs from the south.”) (Rotella 219)⁽¹¹⁾。二つ目の例 (“and in the maple...”) では song sparrows に対応するように (“the complementary”) ショウジョウコウカンチョウ (“the cardinal”) が鳴き、その音が合図 (a

whip、ムチの音）となって春が動き出す⁽¹²⁾。カエデやショウジョウコウカンチョウの緋色は緑に対する補色でもある。緋色（“cardinal”）は教皇やその衣の色も示すため、ここでも自然と人間文化のイメージが重ね合わせられていると言える。また、丘にもわずかな擬人化がなされている（“the sleeper awoke”）が、このイメージはすぐに現実の描写に戻る（“In his cap lilac whitened”）。このようにして自然が前景化されながら、そこにうっすらと人間のイメージが合わされるのだ。

また Bishop は、自然と人間のイメージを重ね合わせるために、知覚が混交するような表現を用いている。この詩では特に音と視覚が混交する。最後の二行（「ウシガエルは鳴いている、緩んだ弦（ひもと楽器の弦が掛けられている）が重い親指に引っ張られ」“slack strings plucked by heavy thumbs”）では、音が視覚的な表現に接合されている。“thumb”という語には、名詞形で「親指」のほかに動詞形で「楽器を親指でたどたどしく演奏する」という意味もある。このため、カエルの鳴き声が、指で引っ張られて伸びていく紐のように視覚的に捉えられると同時に、たどたどしい音楽にも例えられているのだ。

Bishop はこのように、視覚と聴覚が混交するような表現を使いながら、一つ一つの要素（植物、鳥、動物など）を対話させるように描写していく。そしてそのネットワークに微かに人間のイメージも重ねることで、人間存在を世界における中心的存在としてではなく、単なる要素の一つとして描いているのだ。作品中では、現実描写とそこに重ねられたイメージの世界を含めて、人間を含む複数の世界のレイヤーが構成され、それらが立ち現れては消えるように描かれる。

Susan McCabe は、このように諸事物がネットワーク化された風景（丘）を身体表象として捉えている。そして Bishop が客観的に風景を描いていくだけではなく、その中にゆっくりとした時間の指標を置くことで、（春、恋人を）「待つ」と解釈する。McCabe は（作者も思わせる）詩の話者がこの「待つ」という行為によって、その風景に参加していると論じている（116）が、それだけではない。このように、人間も含めてネットワーク化された世界観は、プラグマティストの思想にも影響を受けている。John Dewey をはじめとするプラグマティズムの思想は、Darwin の進化論から着想を得ている。彼らは、人間の思考を含む「世界」は時とともに発展はするが、この発展は必然的ではなく偶発的だと考えた（Shusterman 192）。さらにプラグマティストたちは「相互共生関係」（symbiosis）というキーワードを使いながら、現実の構造と人間の思考の構造は不可分に共生していると主張した⁽¹³⁾。symbiosis の概念に影響を受けた Bishop は、複数の現実や物質性が相補的に存在するネットワーク状の世界を作品で表現しながら、詩の全体をまとめる視点としての主体（話者の視点）がその中を浮遊する、という手法を用いている。

またこの連で Bishop が人間文化としてキリスト教文化を示しているのは、後述するように、Bishop がキリスト教文化の帝国主義的な性質に疑問を抱きながら、Dewey や Darwin の思想をそれとは対比的なものだと考えたからだ。Bishop はこの詩で自然と文化を対比させた上で、文

化が自然を支配しているようには描かない。ただ自然界のネットワークを描いた上で、ほのかに感じられるイメージとして文化的な要素をそこに加えるのみである。前述の詩において、文化的なイメージの要素は自然描写に加えられたとたんに消えていくように表現される。Bishop は詩的言語の持つ音や意味の二重性を用いて、言語によって構築された自然と文化の二項対立を崩しているのだ。

Darwin

Bishop にとって Darwin の進化論とは、現実と非現実、意識と無意識を重ね合わせる手法としての、Surrealism の代替モデルだった。Surrealism は感傷的ではない自然観を提示した。たとえば、彼らはロマンティシズムのように自然を倫理的に捉えなかったのだ (Rosenbaum 72)。しかし Darwin の自然観はさらに人間中心的ではない。キリスト教が自然を精霊の現れだと考えたのに対して、Darwin の自然観はそのような考えを強要しない。また性的な面においても、Darwin は「非生殖的なセクシュアリティ」の存在を指摘し「母性を重視しない」(Rosenbaum 71)。レズビアンであり、キリスト教のモラルや Freud の男性中心的な性理論を好まなかった (Rosenbaum 71) Bishop にとって、Darwin の言説は魅力的だった。

Darwin の自然選択思想には男性、白人の支配を支持しているという批判があるものの、文化と自然の関係を説明する新たな学問分野を作ったという点で、フェミニストの観点からも精査する価値はある、と Elizabeth Grosz は述べている (27-28)⁽¹⁴⁾。本質主義と神学に対して Darwin は繊細で複雑な批評を行った。彼の議論の特徴は、偶然の強調、時間に制約を受けた(種の)特徴 (time sensitive characteristics) の累積、そして時間の不可逆性である。神学に挑戦するダーウィン論を支持していた Bishop の視点は、Grosz の Darwin 論に照らしても鋭いものであったと言える。Bishop は Darwin についてこう記している。

... And I do admire Darwin! But reading Darwin, one admires the beautiful and solid case being built up out of his endless heroic observations, almost unconscious or automatic—and then comes a sudden relaxation, a forgetful phrase, and one feels the strangeness of his undertaking, sees the lonely young man, his eyes fixed on facts and minute details, sinking or sliding giddily off into the unknown. (Bishop 1983 288)

William Carlos Williams や Marianne Moore といった、Bishop の先行詩人であるモダニストたちにとって、Darwin は正確性と客観性の美学を体現した人物だった (Pickard 271)。しかし Bishop にとって、Darwin は親密で個人的な「人物像」としてのヒーローだった。外的なものに非常に熱心に意識を向けるために、気づけば無心にまでなってしまう彼の観察行動を「ヒロイッ

ク」だと Bishop は褒め称える。Bishop にとって観察することとは、過去のトラウマにとらわれない（「深み」に落ちない）ために何か外界のものを認識する、という行為だった（Kalstone 220, Ellis 49-50）。その手本を Darwin の外界への集中に見ていたのだ。さらに Darwin が概念からではなく、詳細な観察から理論を立ち上げている点が彼女にとって重要だった⁽¹⁵⁾。彼に倣った細部の重視は“A Cold Spring”の最終連で表現されている。

Beneath the light, against your white front door,
the smallest moths, like Chinese fans,
flatten themselves, silver and silver-gilt
over pale yellow, orange, or gray.
Now, from the thick grass, the fireflies
begin to rise:
up, then down, then up again:
lit on the ascending flight,
drifting simultaneously to the same height,
—exactly like the bubbles in champagne.
—Later on they rise much higher.
And your shadowy pastures will be able to offer
these particular glowing tributes
every evening throughout the summer. (Bishop 2011 56)

第二連と同様に、最終連でも自然描写と人間的なイメージ（シャンパンの祝杯）が重ねられている（Rotella 219, McCabe 119）。しかしさらに、このイメージには個体ではなく Darwin が述べた種としての目的の達成（種の成立）を祝う、という意味も込められている。Darwin は個体の目的のない行動が繰り返されることにより、その特徴が累積して最終的に種の特徴や有利性となることを述べた。これを考慮すると、この最終連には、明らかにダーウィン論の影響が感じられる。最終連前半部で「扉にとまっている蛾」という非常に些細なものにクローズアップすると同時に「種」の群れを Bishop は描く。そして後半部は別種の生物（蛍）の描写によって、個別的な事象の積み重なりが種の変容につながることを描いている。このことは Bishop が“Darwin Letter”で、“his attention to the facts of minute details”と、ダーウィンの細部に対する強烈な観察力を讃えていることからわかる。また Zachariah Picard が述べる、Bishop の詩の特徴“The jump from a patient accumulation of detail to an imaginative realization of something larger and more abstract is...the pattern that underlies a number of her poems”（276）とも合

致している⁽¹⁶⁾。

Bishop はこの頃、Darwin の航海記 *The Voyage of Beagle* (1839) を読んでいた (Anderson 50, Bishop 1994 255)。ここには自然選択思想等の元となるメモが書かれているのみであり、彼女が *Origin of Species* (1859) を読んだことに明確に言及しているのは1960年代だ。このため、この時点ではプラグマティストを通して、彼女は Darwin の思想から影響を受けていたと考えられる。Dewey は1910年に “The Influence of Darwinism on Philosophy” というエッセイにおいて、*Origin of Species* (1859) は固定的な知識 (knowledge) に対抗しながら、種の「変化」について論じていると言う。

But the changes in the living thing are orderly; they are cumulative; they tend constantly in one direction; they do not, like other changes, destroy or consume, or pass fruitless into wandering flux; they realize and fulfil. (Dewey 3 in Wilson 200)

この議論を参照すると、前述の詩における蛍の描写は「種」の個別的かつ集団としての「秩序ある」「累積的」な動き (“drifting simultaneously to the same height”) を示し、その目的の「成就」を祝っている (“—exactly like the bubbles in champagne.” / “—Later on they rise much higher.”) と考えられる。

Elizabeth Bishop の作品における浅さ・深さ

またこの詩の同箇所には、Bishop が1930年代から関心を抱いていた浅さのモチーフが示されている。蛾の群れは「平面」的な模様として描かれる。そして羽の動きは、ものとしての深さと模様としての浅さの間を行き来する。その後、画面が切り替わるように蛍の垂直的な動きが示され、この蛍の描写に祝杯のシャンパンのイメージが重ねられる。個別の蛍の動きは一定の高さまで動いているが、ついにそれを「超える」時がやってくるであろう。後述するが、この蛍の繰り返す動作はプラグマティストによる「意味」をめぐる主張を想起させる⁽¹⁷⁾。このプラグマティストの主張において、意味とは所与のものではなく、人間が繰り返し経験を回顧することで継続して再生産される⁽¹⁸⁾。

Dewey は空間的に隔てられた同じ形式の行動、同じ儀式を繰り返す種が変化を通じて単一の道筋 (“a single course”) をたどることを強調している。その前提として個体の “aimless flux” (目的のない流動性) が提示されている (Dewey 2-4 in Wilson 199-201)。前述した第一連の丘の描写 “aimless” という語は、詩の話者、すなわち人間の当て所のなさを示すと同時に、ある「個体」の行動の当て所のなさも示している。個々の生物は種の全体的な目的など意識していなくても、何らかの行動を繰り返すことで種としての同一性は保たれる。だが同時に、そうした当て所のな

い行動からあるとき変化が生じるのだ。“These particular (詳細な/個別の) glowing (鮮やかな・白熱した) tributes (贈物・賛歌・事物の特性の具体的な現れ)” は「夜な夜な」(“every evening”) 牧草地に生まれる。Bishop はここで、個別の詳細を観察する視線を提示しながら、それらの動きが繰り返されることで、あるとき突然の変化が起こることも描いている。“tribute” という言葉には、画家や詩人として細部を愛す視線と、牧場主である Jane Dewey (John Dewey の娘) への捧げ物という意味をかけているだろう。加えて Darwin による個体変異についての見解、すなわち「個別の特徴の差異 (変種) はどんなに些細なものでも、ある個体が持つほかの個体に対する優位性となる」「さらにその個体の優位性は時間をかけて増幅される」(Darwin 328)、つまり個体にとっても種にとっても些細な変異こそが重要である、という洞察が反映されている。このような Dewey を介した Darwin の思想の表現は、Dewey が述べる「意味の発見」を Bishop が表現するための下地となっている。

知識の仮定性

Helen McNeil もまた Bishop へのプラグマティズムの影響を指摘している。そして「自然」は「記号」として読まれるべき聖書 (の具現化) であるというよりは、それ自体が価値を持つ、複数のもの (objects) や感覚 (sensations) の集合だ、とプラグマティストたちは考えていると指摘している。

The pragmatic line I am proposing is descended from the Puritan tradition..., but it does not need concepts of original sin..., and it sees nature as complex collections of objects and sensations with value in themselves, rather than as a Book of God to be read only as sign. (McNeil 196)

Bishop は、言語で示された理想 (神) の実現としての現実、という考え方を認めていない。むしろ人間は目に映るものを現実と認めたのちに、それに意味を帯びさせる、という立場を取る。精神を含んだ身体は自然と切り離せない関係の中にある。したがって意味とは身体と自然の相互作用から生まれる、と彼女は考えているのだ。知識に絶対性がないならば、世界そのものに知識や真実性を求めるよりも、主体がどのように世界と関わるかに注意を払うことになる。McNeil はまた、プラグマティスト詩人は単なる「自然詩人」ではない、発見の過程を重視する詩人だと述べる (196-97)。Francis Dickey も、単なる自然描写詩人という Bishop への評価を否定して、「世界に (理解されるべき、知られるべき) どのようなものがあるか」よりも、むしろ主体が世界の理解を形成する方法に注意を払っていると述べる (302)⁽¹⁹⁾。

Dewey は知覚による環境への関与を通した主体の変容を重視している。彼は精神を自然の一

部として扱っており、人間の経験はほかの自然的な現象と相互作用を持つ、と考えていた。彼にとっての経験とは、それまでの考え方のように内部に引きこもった個人的な「精神」活動ではなく、外部と生体を結ぶ活動を含むものだった (McDonald 73)。Dewey は *Art as Experience* (1934) の中で、なぜ日常の生活が「高貴な」芸術と区別されるのかを問う。彼の説明によれば、生活は制度化の中で物質的／精神的なものに区分される。肉体を使わず精神を用いて「本質」を考える人が高い地位を得る一方で、感覚と肉体には低い価値しか与えられない。環境と関わり生活することには発展の可能性が伴うのに、モラリストたちはこれを認めず、むしろ環境との関わりは精神の発展を阻害するとまで言う (20-22)⁽²⁰⁾。しかし経験は有機体と環境との相互作用の結果である。そしてこの感覚による経験を、熟慮された表現やコミュニケーションから得た意識的な意味で満たすことで、芸術へと高めることができる (24-25)、と彼は述べている。

Bishop がプラグマティズムの考え方に影響を受けた背景は何か。彼女は先行詩人である Marianne Moore (1887-1972) から詩の校閲や助言を受けていたが、30年代後半から徐々に自分のスタイルを確立する。きっかけとなったのは「深さ」に関する Moore との意見の相違である。Moore は Bishop に「キリスト教的な真実」や「詩に深みを持たせること」を示唆し、より倫理的で形而上学的なキリスト教的文化批評を勧めた (Samuels 32-37)。しかし性的マイノリティであった Bishop は、性の規範に非寛容な側面を持つキリスト教に違和感を感じ、Moore の勧めを受容できなかった。ここで彼女が典拠にしたのが Dewey や Darwin の思想だったのだ。

Dewey の「深さ」の定義は知覚に基づいている。ものの表面の知覚(触覚)が他の諸感覚によっても認識される。人はそれらの感覚を駆使して意味づけをし、これが「深さ」となる。またそのような過程を持たない「意味」は一つもない、彼と述べる。

The sensible surface of things is never merely a surface. One can discriminate rock from flimsy tissue-paper by the surface alone, so completely have the resistances of touch and the solidities due to stresses of the entire muscular system been embodied in vision. The process does not stop with incarnation of other sensory qualities that give depth of meaning to surface. Nothing that a man has ever reached by the highest flight of thought or penetrated by any probing insight is inherently such that it may not become the heart and core of sense. (Dewey 1934 29)

これは Reinhold Niebuhr の (すでに決定された言葉による)「キリスト教における真実」が意味の「深さ」である、とする考え方と鋭く対立するものだ (Samuels 33)。Dewey は「当て所なく進行中の経験」と「目的を達成するための経験」を区別し、その受動性と能動性を芸術(創造)的・美的(鑑賞)経験にも当てはめている。経験論者は能動的な経験を強調するが、能動的な行

為を強調しすぎると、全ては「表面的である」(すでに知っていることを経験に当てはめるだけになり、表面的に事実を追認しているにすぎないため、「深い」経験ができない)。この表面的な上滑りに比べて、経験の「深さ」とは、精神と自然(対象)との相互作用によって創造される。そして能動的なことと受動的なことは相互的、累積的、継続的に作用しながら、それを通じて意味(深さ)がつくられる(Dewey 1934 39-41)。このような意味の発見過程では、何かを達成する能動性だけではなく、何かを感知する受動性も重要である。

このような精神と自然の関係は Bishop の美学の基礎となった。Bishop はあらかじめ意味を設定することなく、自分の主体性と外界の関与を意識しながら半ば受動的に詩を書いた。また“A Cold Spring”で見られるように、諸要素が世界のネットワークを構成しており、その中に存在する特権化されることのない要素の一つとして人間の精神や身体、言語・言説があると考えた。

Bishop は意味の不確定性というポストモダン的な特徴をすでに40年代に示しているが、その描写は「表面」的なものとどまらない。しかも言語中心の世界を構築しようとしてもいない。むしろ所与の正しい意味がないとすれば、意味とはどのように生じるのかを、主体と世界の関与を元にしながら彼女は考え続けた。

注

- (1) Bishop の初詩集 *North & South* (1946) と *A Cold Spring* (1955) は合わせてピュリッツァー賞を受賞した。性的マイノリティであった Bishop が当時賞を受けたことは快挙だと Camille Roman は論じている (Roman 2001 119)。
- (2) Klee は晩年皮膚硬化症にかかったため、身体の統合感が持てなかった。
- (3) 美術誌 *Cahiers d'Art* (1945) の Klee 特集号。
- (4) 米国代表の詩人として詩に対する国民の意識を高める職。現在の正式名称は Poet Laureate Consultant in Poetry to the Library of Congress (桂冠詩人) である。
- (5) Johnathan Ellis (133) はこれは西洋における共産主義の価値を低める視線を反映した書き方であり、共産主義者の考え方が光によって議会議事堂と接触し、その結果 'heavy' で 'coarse' となったという解釈を行っている。
- (6) Bishop は40年代にコラージュに関心を抱いていた (Samuels 2010 102-128) ので、ここにはその影響が現れていると考えてよいだろう。
- (7) Bishop の日記で、彼女には珍しく性的な隠喩を込めて、議会のドームを女性的なイメージとしてメモしていることもまた、Roman は明かしている (VC, Box 77.4, p.4, qtd. in Ellis 133, Roman 2001 124)。このドームが示す女性性と、木々の示す女性性のつながりについては記されていないが、Bishop が両方を女性性として捉えていたということは論証されている。
- (8) Jane Dewey は国防に仕える物理学者だったので、人の手で作られた核によって春がなくなるということもこの詩は暗示しているのではないかと Roman は述べている (Roman 2001 139)。
- (9) “grave” は「厳かな」という意味のほかに第二強勢を示す「抑音」を示す。“grave green” に抑音アクセントを置くことでも春の遅さを示している。
- (10) 当時の批評家たちは Calder の作品を Mondrian に代表される幾何学的な作品と生物の形に倣った (biomorphic) 作品を調停し、Mondrian の作品から自由になったものとして捉えていた。(Samuels 180)。

- (11) “dogwood” (ハナミズキ) の花卉は端が焦げたように縮んでいる。装飾模様となったハナミズキの花卉はキリスト教のエンブレムであることを Rotella は指摘している (219)。後述する Dewey による “The influence of Darwinism on Philosophy” において、種の「変化」を示す例として “Rapid and extensive changes occur, ... in many things—as when wood is touched by fire” (Dewey 3 in Wilson 200) とある。このため「タバコの燃えさしによって焦げたような花卉」とは、「種の急激で著しい変化」も示しているのだろう。
- (12) 「猩々紅冠鳥」。全身が赤い。
- (13) 人間が現実だと捉えるもののうち、精神が認識する部分と自然が形づくる部分は区別できない、と彼らは考えた (Shusterman 192-93)。
- (14) Freud の男性中心的な性理論はその性差別性を差し引いたとしても、主体や欲求についての有効な理論を提供したと言える。Grosz はそうした彼に Darwin をなぞらえている。
- (15) Dewey も Bishop と同様の理由で、*The Influence of Darwin on Philosophy* (1910) において、Darwin を哲学上のヒーローとしている (Dickey 313)。
- (16) Picard は “Darwin Letter” の分析をとおしてダーウィン思想の Bishop への影響を考察している。
- (17) プラグマティズムによるこの意味をめぐる主張は、Darwin の種の概念に刺激されたものである。
- (18) Dewey は Darwin を引きながら、「種」の概念とはお互いに「空間的に隔てられて交わることがないもの」を指しており、かつ同種の生物が同じ儀式的行動を繰り返すことによって作られるとして、このように記している。

The same density in countless myriads of individuals so sundered in time, so severed in space, that they have no opportunity for mutual consultation and no means of interaction. As an old writer quaintly said, “Things of the same kind go through the same formalities”——celebrate, as it were, the same ceremonial rite (Dewey 3 in Wilson 200).

- (19) Victoria Harrison は Bishop に、ネオ・プラグマティスト的な「真実だと訴えるすべての主張の放棄」を見る (3)。
- (20) 例えばモンテニューバスカル。

参考文献

- Anderson, Linda R. *Elizabeth Bishop: Lines of Connection*. Edinburgh UP, 2013.
- Bishop, Elizabeth. *Poems*. Original ed., Farrar Straus & Giroux, 2011.
- “The Darwin Letter.” Schwartz et al, *Elizabeth Bishop and Her Art*, p.288.
- Bishop, Elizabeth, and Robert Giroux. *One Art: Letters*. Farrar, Straus, Giroux, 1994.
- Costello, Bonnie. *Elizabeth Bishop: Questions of Mastery*. Harvard UP, 1991.
- Darwin, Charles. *The Origin of Species*. J. M. Dent; E. P. Dutton, 1928.
- Dewey, John. *Art as Experience*. Capricorn Books, 1959.
- “The Influence of Darwinism on Philosophy.” *Darwinism and the American Intellectual: A Book of Readings*, edited by Wilson, Raymond Jackson, Dorsey Press, 1967. pp. 198-210.
- Dickey, Frances. “Bishop, Dewey, Darwin: What Other People Know.” *Contemporary Literature* Vol. 44, No. 2, Summer 2003, pp. 301-31.
- Ellis, Jonathan. *Art and Memory in the Work of Elizabeth Bishop*. Ashgate, 2006.
- Grosz, Elizabeth. “Darwin and Feminisms: Preliminary Investigations for a Possible Alliance.” Alaimo, Stacy, and Susan J. Hekman, editors. *Material Feminisms*. Indiana University Press, 2008, pp. 23-51.
- Harrison, Victoria. *Elizabeth Bishop’s Poetics of Intimacy*. Cambridge UP, 1993.
- Kalstone, David, and Robert Hemenway. *Becoming a Poet: Elizabeth Bishop, with Marianne Moore and Robert Lowell*. U of Michigan Press, 2001.

- McCabe, Susan. *Elizabeth Bishop: Her Poetics of Loss*. Penn State Press, 2010.
- McDonald, H. P. *John Dewey and Environmental Philosophy*. State University of New York Press, 2004.
- McNeil, Helen. "Elizabeth Bishop and the Pragmatic Line in American Poetry." Menides et al., editors. *In Worcester, Massachusetts*, pp. 195-212.
- Menides, Laura Jehn, and Angela G. Dorenkamp, editors. *In Worcester, Massachusetts: Essays on Elizabeth Bishop, from the 1997 Elizabeth Bishop Conference at WPI*. P. Lang, 1999.
- Pickard, Zachariah, "Natural History and Epiphany Elizabeth Bishop's Darwin Letter." *Twentieth-Century Literature*, Vol.50, No.3, Fall 2004, pp. 268-282.
- Roman, Camille. *Elizabeth Bishop's World War II-Cold War View*. Palgrave, 2001.
- "Cold War 1950: Elizabeth Bishop and Sylvia Plath." Menides, Laura Jehn et al. *In Worcester, Massachusetts*, pp. 247-58.
- Rosenbaum, Susan. "Bishop and the Natural World." Cleghorn, Angus, et al. editors, *The Cambridge Companion to Elizabeth Bishop*, 2014. pp. 62-78.
- Rotella, Guy. *Reading and Writing Nature: The Poetry of Robert Frost, Wallace Stevens, Marianne Moore, and Elizabeth Bishop*. Northeastern, 1990.
- Samuels, Peggy. *Deep Skin: Elizabeth Bishop and Visual Art*. Cornell UP, 2010.
- "Elizabeth Bishop and Paul Klee." *Modernism/modernity*, Vol.14, No. 3, September 2007, pp. 543-68.
- Shusterman, Richard. *Surface and Depth: Dialectics of Criticism and Culture*. Cornell UP, 2002.
- Schwartz, Lloyd, et al., editors. *Elizabeth Bishop and Her Art*. U of Michigan Press, 1983.